

ねこみ

猫 表 通 信

平成五年
(1993)
一月十五日発行
(年四回発行)

発行人 東 明 雅
発行所 柏市つくしが丘2-2-12東明雅方
Tel. 0471-75-1192

牙 盾 付

東 明 雅

一月三十一日は故高橋玄一郎氏の祥月命日である。昭和五十三年のこの日に没されてから、既に十五年の歳月が流れた。この間、連句は飛躍的に発展し、盛大になっているが、今日の作品を鑑賞におられる氏が見られたら、何と言われることであろう。氏はもともと詩人で博学、詩論、詩史にくわしかった。昭和三十六年、根津芦丈翁に遭い、連句の手法に共感、連句をはじめ付け方として、打越を考えず、前句の反対で付ける付け方を編み出し、牙盾付と名づけられたのは、昭和四十七、八年ごろからであったと思う。

A フランス菓子にききしリキュール玄一郎
肉を挽く肉屋よ月のムンク展 静生
独房にきく蟋蟀の雨 玄一郎

B 青き踏むシンナー遊びに魅せられて真彦
水族館の人魚長生き 実
せんべいの塩味のり味カレー味 節子

これらの作品の付心を説明するのは難しい。極端に言えば、前句を全然無視して、前句と無関係に付け進んで行っているように見える。しかし、この非連続の連続には、また、否定出来ない存在感、平たく言えばおもしろさが存在することも事実である。

これは万葉の昔の「無心所着」の歌、そしてその流れの中にある「守武流」の俳諧の現代版とは考えられないだろうか。
吾妹子が額に生ひたる双六の
ことひの牛の鞍の上の種(万葉集巻16)

吾背子が横鼻にするつぶれ石の
吉野の山に氷魚ぞさがれる(同右)
「無心所着」は、奇抜なものを取り合わせ、

できるだけナンセンスな歌を作る遊戯歌であるが、その手法が俳諧の祖荒木田守武に採用され、その「守武流」は、談林俳諧とともに井原西鶴の新しい俳諧に取り入れられて、貞門俳諧の永い情眼を覚したものであった。

俳諧の付け方が、貞門、談林時代の物付・心付から、芭蕉による余情はへにおい、うつり・ひびき・位などの付け方に落ちついてしまった今日の連句に、新しい手法を取り入れようと努力されたのが、高橋氏だったのである。

歌仙は三十六歩、一歩もあとに播る心なしという俳諧の大前提を玄一郎氏は否定されなかった。それどころか、そのために氏は、正・反・合と展開して止まぬ弁証法の理論を導入されたのであった。だから、理論的には連句の手法として牙盾付は成立する可能性もあると思う。しかし、実際の作品になると、その捌き手は余程の才能の持主でない限り、付味も転じもない、それこそ、芦丈先生のいわれる「一夜店のステッキ」の作品になるのを免れないであろう。牙盾付について我々はもう少し研究を続けるべきであろう。

文台について

阿部 太

石川大会に於いては、猫表会の方々とお会いし懐かしく思いました。中でも文台を授かった方より、「作られたのはあなただそうで」と丁寧なる礼を言われ、面食らいおどおどするばかり、誠に恥かしい次第でした。

当北陽社では年に二回以上正式俳諧興行が行われます。その時、執筆の方が文台を

捌き、懐紙に書入れ連句の進行を取扱います。終われば水引にて綴じ、文台に乗せ床に納めて終了致します。芭蕉さんが、「文台引下せば則ち反古なり」と云われていますが、此の一卷に自分の句が入っているかと思うと中々忘れ得ぬものであります。

文台は北陽社の宗匠方皆さんお持ちになつています。新しく宗匠になられた人に頼まれて作ったのが私の文台作りの始まりです。素舟さんを通して東先生より文台製作を依頼された時は身の引締まる思いでした。作るに当り文台を見せて頂きました。北陽社のは樟がほとんどです。尾花沢市の芭蕉清風歴史資料館に展示してある文台も見ましたが、手に取って見る事が出来ずガラ又越しに見ました。材質は桐で、大体測った所一尺一寸に一尺九分と面は北陽社のと余り変わらず高さも同じ位でした。しかし筆止めは違うようです。北陽社のは左右にあり、尾花沢資料館のは小口の化粧に付けたのは右半分という具合で違っております。表に書かれている句や絵も様々で、その人の好みようです。

尾花沢市の資料館のは、絵は右に二見ヶ浦の絵、左下隅を扇の要にした扇子に梅の絵が画かれています。此の文台には、陣場村の冬翠館主の需めに応じ、獅子門道統第三世(美濃派)仙台盧元坊(黄檗園)書いた裏書があります。

二見形

ことし小春も中頃ならん羽州最上の何某社より此裏書を乞れて

今や浪の花も
二見に
掃り咲

黄檗老人*

の説明があります。文台を作るものとして外に展示してあればみたいものです。

* 麗へんに鳥、黄りは朝鮮鶯一編集部

桃雅会誕生

杉山 壽子

平成四年二月の始めだったと思います。矢崎藍さんから突然電話。

「壽子さん、貴方立つんでしょ！」

「キョトン？ 立つって？」

何が何だかわけがわかりません。押し問答の末、藍さんは私では埒が開かないと思われたようです。その後、藍さんから何の音沙汰もないので、この件はこれで終わったと思っておりました。

「利子さん、壽子さんについて名古屋へ移籍しなさい！」

「キョトン？」

ころも連句会でお仲間であった武村利子さんが、藍さんからの分厚い手紙を持っていらっしやいました。どうやら藍さんは、利子さんに押し、押しの一手だったのです。遊びを遊んでいるだけの私には、お仲間なんてありません。しかし、新聞雑誌で、連句復興の情熱をペンで表現しておられる藍さんには協力したいと思えました。

「名古屋でみそ煮込み食べて太ってりやいってものじゃないだろ……」

と、陰の声の痛烈なパンチ。

（エビフリヤーも、ワイロも食べトルワァー）

「モウヤルツキヤナイッ！」

と藍さんに叫びました。

地域活動には何も参加せず、目立たず、名古屋の隣の市に住んでいる私は、生まれ育った名古屋の方に相談するしかありません。猪子春治殿、細川研三殿、吉川嘉次郎左工門殿のお三方にお願いしました。

「何かようわからんけど、やってみましよう」

この時のお三方が神様にも仏様にも見えませんでした。ほんとです。多くの方の気持ち良いご参加、会場を用意してくれた夫、優しさの塊りのような会です。

生みの親の藍さんの「鶴の二声」で誕生育ての親に式田和子宗匠を選んでいただきました。藍さん有難うございました。

東明雅先生、桃徑庵宗匠、両先生のお名前を一字ずつ頂いた大変な名前です。気取らず、無理せず、楽しく、宗匠のきめこまかなご指導のびやかに遊んでおります。なにはともあれ薫風発祥の地です。一句付けにお立ち寄り下さいませ。

二十韻 『桃雅会』の巻 杉山 壽子 撰

穀雨かな育ち盛りの桃雅会

猪子春治

春燈して続く語らひ

細川研三

ふらここへホチステテ駆けるらん 田辺広子

手作りケーキ紅茶おいしく 田々宮芳

仏法僧声聞く宿にかかる月 武村利子

蚊にさされつつ甘きささやき くのあや

口づけをせんとやぶひに夢覚めて 芳

屋根神様を祭る朝 三

沢山の無駄で出来てる 便利 性 治

主によく似た猫も小ぶとり 利

懲りずまた書かぬ日記を買ひにでる 三

ビルの窓拭く凍しゴンドラ鎌倉かよ子

パンコクの夫を想へば眠られず山田歌子

廣合はせてうす寒の闇 三

月夜か港へ帰る測量船 吉川嘉次郎左工門

心せきつつ冬支度なり 歌

老いてまだ盛んな人がうらやまし 門

母の形見の藍の大島 か

鯨の目のくるりと動き花の城 芳

薫風地にてのどか琴の音 広

平成四年五月二七日満尾 於 住友クラブ

新刊案内

『連句恋々』

矢崎 藍 著

連句と向い合って正座して書かれているのが従来の連句入門書です。

連句という人に一目惚れした藍さんが、その一部始終を綴ったのがこの『連句恋々』です。

どこに一目惚れしたかは「付けてみませんか」の章でよく分かります。恋は話を通じないと成立しません。付く、付け味の衝突は会話に当ります。しかし、恋を発展させるためには転換が必要で、それが「三句目で転じて広がる世界」の章でよく分かるでしょう。

藍さんはだんだん連句さんと深間にはまっています。そうしたら身元調べも必要で、連句の出自もちゃんと入れ、社会とのかかわり合いもぬかりなく調べて入れてあります。こうして連句さんに首ったけになって泥沼につかりながら、読者も引きずり込んでいく本で、連句愛好家は勿論、「え、連句ってどんなもの？」とお思ひの方、一冊読み通すと、もうあなたも連句さんと切れない仲になってしまおうそんなお返めの本です。

筑摩書房刊 一六〇〇円（式田和子）

S S S S S S

夢みるもぐら

篠原 達子

むかし気楽な自主サークルで芭蕉の講義を聴き「連句」の存在を知った。これは面白そうと皆で入門書を買いやってみた。どんぐりが輪になってわいわいと、それなりに面白かった。

もの書きの友達が、さる席へ誘ってくれた。作家、詩人、医者、編集者、ETC、全く未知の魅力的世界。けど、只の主婦に短冊は無論のこと差し出すものが無い。「楽しかったらまたどうぞ」……「ひとりACCに申し込んだのはそれから（昭和六二年春）。狼ならぬ一匹もぐらだ。さて、講師はすらりと素敵、正にここは教えてくれる場だが付句がちっとも出来ない。初心は私のみで、どうやら只の主婦は一人もいないらしいと判ってきた。やめようかと揺れるもぐらに声かけてくれたお人があり、思い直した（今も感謝している）。

猫養例会、柏連句会とおろろお世話になる。教室でたまに褒められ、半ば判るような判らぬような、でも嬉しい。そのうち雲の上と覚しき方角からお誘いがあり、嬉しさも恐ろしさ。昨年は「源心庵」の席成立のお蔭で機会がぐっと増え、多くの方とつながりが出来た。「達子さん、句数足りない、花前か挙句ね」。もう毎度のことで、めげていたらやれない連句である。

毎回何かしら知る喜びがある。付句の面白さ意外に驚かされるのは楽しい。一巻の行方を追って創造緊張の時間共有、私にも場所があると思えるこの幸せ、連句はもうやめられない。

◇ 猫養作品集Ⅲに多数のご参加頂き有難うございました。上梓は平成五年四月頃の子定です。その節はよろしくご協力お願い申し上げます。編集担当 下鉢 清子

草原は鳴る

高橋 豊美

平成四年八月にモンゴル旅行をしました。なにもない大草原が見たくなって、そう思うと見境なく出掛けてしまいました。大草原に立ったとき、その時感じたことは、まだよく表現できません。汲み尽くせない感動がまだ残っています。そこに自分の足で立った経験が掛け替えのないものであったことは確かです。人はこういう所でも生きてゆけるのだな。私は、とてもこの苛酷な自然の中に住み着くことはできませんが、いまこの大地を全身で感じる事ができる。こういう経験をすることはこれからの人生の強みだな、そう思いました。

空はモンゴリアンブルー、風が渡り、草はゆれ、紫の花の煙るようにつづくミントが香り、ばったの羽音はうなり、鷹が低く飛んでいます。モンゴルの珠玉のような、短い貴重な夏です。

今回の旅行は、同行した人達にも恵まれました。三味線を抱いてきたひと、芸人を追いかけて馬頭琴を習った人、何か国語も話し日本文学が好きだという天才的な少年ガイド、皆が個性豊かでしなやかな感受性を感じさせる人達でした。

モンゴルの人達は、皆充足している感があります。首都の商店の肉売場には長い行列ができ、食料品が不足しているにもかかわらず、そよかぜがいつも肩を吹いているような爽やかな身のこなし。

旅の途中、遊牧民が、ゲル(テント)に私達を迎えてくれました。帰るときに、駝の深い年齢の良く分からない女主人に向き合って、私達の旅行団最年長の女性が相手の肩にふれ、ありがとう、お元気でと言うと、女主人も手を肩に延ばしうなずきまし

た。同じ時代を遡る世界で生きぬいてきた二人の一期一会の挨拶に感心しました。

こういう境地になるまでには、豊かで辛い経験をどの位しなければならぬのだろうか。しかも誰でもそうなるわけではないのだぞと暗く声がする。

ともかく私はこの旅行では、元気をもらって来ました。友達も沢山できました。また、行きたいと思えます。

南ゴビ

モンゴルの草原は鳴るばったかな

遊牧のナイフを洗ふ花野かな

秋の空近くて山羊の駆けあがる

前脚をつながれた馬ゴビの秋

盛気楼

大草原その果てにある秋の海

良夜かな馬頭琴弾く影二つ

占の獣骨撒けば流れ星

恋をして溜璃球煎ひっこぬく

ラマの小僧線香刻む秋日和

豊かなる老年の秋チーズかむ

ブルドのキャンブ

草もゲルも馬も音して夕立かな

馬と大草原に消え爽やかに

モンゴル相撲

子をつれて勇者の掃る花野かな

馬乳酒の良くできた秋子の笑ふ

天の子守歌を歌ったデュエットに

モンゴルの美人に良夜笑ひけり

「この料理は

私達の民族の料理です」

秋の虹羊を屠る人の汗

天の河羊一頭茹るまで

星月夜たちのぼりゆく馬子の唄

羊が食べぬやうに

秋の道われた硝子をあつめけり

「全国連句いなみ大会」へのお誘い

芭蕉は、
「おくのほそ道」の旅で、越中へ入った

の一句を残すと富山を業通りしてしまいました。以来三百年余の間、地元の人達はそのことを大変残念に思っていました。

それがようやく機が熟したのでしようか。昨年二月、俳書のコレクション志田文庫で有名な素琴志田義秀博士の御子息延義氏を会長に、富山県連句協会が設立され、五月には隣の井波町にもいなみ連句の会が発足して、月例の実作会が続いています。

その井波町では、名刹瑞泉寺の第十一代住職浪化上人が、去来の仲介により嵯峨野の落柿舎で芭蕉に入門して三百年になるのを記念して、平成五年七月三日をイナミの日と定め、「全国連句いなみ大会」を開催することになりました。日程は次の通りです。

○七月二日(金)井波の史跡と五箇山巡り

○七月三日(土)連句大会

それに先立って連句の作品を募集します。(三月末日〆切)。要領は国民文化祭に準じていますが、志田先生の「後に残る作品を」という提案で歌仙形式になりました。幸い猫養からも東先生と秋元さんが選者に加わってください。

井波は瀧波平野の山裾にあり、瑞泉寺と欄間彫刻で知られた坂の美しい町です。戦後前田普羅が滞在した縁で俳句も盛んな土地柄です。二年前に私が富山へ赴任する折、北陸にも連句の輪を広げるべく、芭蕉庵の連句教室で捌きの特訓をしていただいた御恩にわずかでも報いる機会になればと思います。皆様のおいでをお待ちしています。

◇ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

一口 諏訪欣二
" 峯田政志
" 佛淵健悟 (敬称略)

◇ 平成五年度の猫養同人会費よろしくお願いたします。

振替口座 東京31550348
猫養同人会
(発展基金もこちらで扱っています)

* 連句とさかな *

あんこう 杉江 杉亭

前号で紹介した三鷹台のすし屋で店の定休日にあんこうを食べる会を開くという。常連十名に声がかかり筆者もお誘いを受けた。

冬至の日の夕方六時店を訪れるとすでに顔見知りの常連二、三名が待機していた。全員揃ったところであんこう鍋を前にして先ずは「乾杯」。今日仕入れたのは八キロ物とのこと。七ツ道具と呼ばれる部分を入れたあんこう鍋は流石に旨い。話と酒が進み、あんこう鍋に腹一杯となつた頃お開きとなった。

(蛇足) 七ツ道具とは、肝、身肉、皮、ぬの(卵巣)、水袋(胃袋)、えら、ひれきう。

羊臭き男と言はれ残響かな

(二村文人)

【Q】 秋季以外の月句の出し方について、名月は仲秋だということは分かりますが、「いざよふ月」などは秋以外には使えないのでしょうか。又、「おぼろ夜」だけで月の句として使えるかどうか教えてください。

(調布市 真田 光子)

【A】 江戸時代の「改正月令博物箋」という本には兼三秋として「十六夜月、これは四季ともに十六日の月をいへども、歌には秋の十六日とす」とあります。「いざよふ」は「ためらふ」、「やすらふ」の意で、前夜の名月(十五夜)は、日没とともに上

がるのですが、十六夜になると、三十分ばかり遅れて、ためらうように上がるので、こう云うのです。もちろん、一年中、十六日の夜は満月の時から遅れて上りますので、春・夏・冬ともに十六夜の月はあるのですが、上る月を今か今かと待つのは秋、それも仲秋に限ります。だから、春の十六夜、夏の十六夜、冬の十六夜も現実にはあるに

違ひありませんが、それは偶然発見したものであり、今か今かと待たれて上る十六夜の月は秋、それも仲秋に限るのです。日本人ほど月に愛着を感じ、月とともに暮らした民族も少いのではないのでしょうか。日本人は、春の花に対して、秋になると月を懐

い、いつ、あの仲秋の名月に逢えるか、それを心に描いて来ました。だから、待宵・名月・十六夜・立待月・居待月・臥待月・更待月という特殊な月の名前が生まれましたが、これはすべて仲秋に限ります。だからいざよふも、初秋・晩秋の月までならば用いる事は出来ましようが、春・夏・冬の月に対しては用いないのが原則です。

歳は春の夜の万物がもうろうと霞んだように見えるさまを言うので、要するに湿気

が多くて、ぼんやり霞んでいる現象をいうわけですが、歳だけでは月の句にはなりません。だから、春の月を出すためには必ず「月籠」あるいは「朧月」と、月の字を入れることが必要です。ただ、たとえば「廣辞苑」などでは、「朧夜」の解として、①おぼろ月の夜、②曇った鏡の形容としてあります。小学館の「日本国語大辞典」を見ても「おぼろ夜、おぼろづきよに同じ」となっており、おぼろ夜と、おぼろ月夜の区別が全くついておりません。

七部集の用例を見ますと、月の定座に用いられた春の月は、次の例で分るようになります。1 あらの 月のおぼろや飛鳥井の君 冬文 2 炭俵 雪の跡吹はがしたる朧月 孤屋 3 猿蓑 さし木つきたる月の朧夜 凡兆 4 ひさご 花はあかいよ月は朧夜 路通 5 冬の日わが月出よ身はおぼろなる 杜園 必ず、月の字が籠に加わっております。朧だけを用いた例としては、

6 猿蓑 それよくの朧のなりやむめ柳 千那 7 あらの 朧夜やながくて白き藤の花 兼正 8 猿蓑 朧夜を白酒光の名残かな 支考 9 冬の日のり物に朧透顔おぼろなる 重五 右の6・7・8は発句、9は平句ですが、月の定座ではありません。

この七部集の話から、天野雨山が昭和十一年から六年余にわたって精魂を傾けた三千枚の労作「芭蕉七部集連句精釈」の大部分が未刊のまま、門下の今棧一氏の手許に保管されていることや、水口豊次郎牧師(俳号・天つ風)から連句実作の指導を懇切丁寧に行うたことなどの興味深い話を沢山伺った。



中村俊定

杉内 徒司

加舎白雄全集出版記念会のひらかれる昭和50年5月11日を目指した付廻歌仙「茶立虫」に左の一連がある。

九官がとぼけた顔でコンニチワ 中村俊定 汗をふきふき御用聞来る 松尾靖秋 男靴ついとかくしてさりげなく 村松紅花

右の付句を俊定先生の書齋で頂く折、私は俳諧時雨忌を今年は落柿舎で張興するとか、先生校注の「芭蕉七部集」(岩波文庫)の発売を待兼て入手したことなど、冷汗をかき乍ら話した。

これはずっと後日のことになるが、春光社主宰今棧一氏に会って、雨山原稿の苦勞話を伺って感銘を受けた。それらが機縁となって、多くの人の協力を得て、未刊原稿の一部「猿蓑」を古川書房から上梓する運びにこぎつけ、先生に大いに感謝されたのは、それから三年後である。

「学習院大学の宮本三郎さんとは昭和十年頃天つ雁先生のもとで一緒だったから、付けてもらいなさい」と、その場で電話をかけて下さった。宮本教授は他日「今年また素人芝居巡回」と付けて下さり、その際も、天つ雁のこと

を伺うことができた。

その後、「猿蓑」出版関係のことでお伺いした折も、先生は世話好きで、教え子を育てるのに熱心と感じた。他の機会に山下一海教授に会ったら、教え子からみた先生の偉大さを伺ったこともある。

門下の女流との連句作品集「燭花」を編いた時、あの折、表六句の御手合せでもお願いすれば! と思ったのは先生没後のことであり、また近頃は、計画中の角川書店「俳文字辞典」人物篇に「天つ雁」の名が見えないのが気にかかることしきりである。

編集部より

○ 新年を迎えまして、本年もよろしくお願いいたします。

○ 「ねこみの」通信も、やっと十号になりました。連句は十巻まいで一稽古とか、本通信も慣れぬ編集部、懸命にとりついてやっておりますが、これからもお知恵ご指導いただきつつ、楽しく実のある読み物にできるよう頑張ります。

○ 朝日カルチャーセンターなど、明雅先生のご講義に接する機会がない方の為に質問コーナー設けておりますが、普段の勉強や実作でお困りのことありましたらお寄せください。

○ 七月、富山で初めて開かれる「全国連句大会」の案内を二村文夫さんに書いていただきました。募吟歌仙ふるってご参加ください(三月末まで)。

季刊「ねこみの」通信 第十号
発行者 猫蓑連句会
印刷所 アトリエ・Neko